

大学間共用 e-ラーニングシステムへの活用

大学間共用 LMS と中規模私立大学の総合認証基盤の構築

京都産業大学

京都では古くから大学間の交流が盛んに行われており、単位互換制度が充実している。近年では e-ラーニングを活用した取り組みも実施されるなど、より積極的な大学間連携を実現するために学術認証フェデレーションの活用が始まりつつある。

課題

京都を中心とした大学、地域社会、産業界の連携を強化するために発足した「公益財団法人大学コンソーシアム京都」。その取り組みの1つである単位互換制度では 2010 年に 48 大学 531 科目が提供されている。しかし単位互換制度を円滑に運用するための環境整備は十分でなかった。京都産業大学が代表校となる戦略的大学連携支援事業「e-ラーニングシステムの共有共用化に伴う共用教育の大学間連携と効率化の推進」では、この単位互換制度の枠組みの下で「共用できる e-ラーニングサーバの設置」に取り組んでおり、申請者情報を確実に認証する方式の確立や、加盟大学とのパスワード連携の実現を目指し、当システムと学術認証フェデレーション(学認)との連携に着手した。

解決策

「共用できる e-ラーニングサーバ」とは、大学コンソーシアム京都に設置し、加盟大学が自由に使えることを目指して構築したシステムであり、単位互換申請システムと LMS の 2 つのシステムからできている。

このシステムは、各大学からみると学外のシステムとして運用されることになる。そのため、単位互換の申請に必要な、学生の名前や学籍番号といった個人情報を大学から提供を受けることは個人情報保護の観点から難しい。従って、当初実装した認証システムは加盟大学から独立したものであった。申請に必要な個人情報を学生本人に自己申告させることで対応したのである。なりすましなどの虚偽の申請を防止するために、登録内容を印刷した書面を所属大学窓口にて提出して本人確認を行ってきたが、これらの作業は科目履修の時期に集中し、窓口業務の煩雑化の原因にもなっていた。そこで、この認証作業をシステム側で代行するため、Shibboleth を活用した認証連携の導入を検討した。Shibboleth であれば、確実に本人のものと大学側が認証し

た情報を受け取ることができ、しかも、大学で使っているパスワードと連携が可能になる。さらに、シングルサインオン(SSO)による運用にも対応でき、利用者の利便性も向上する。

また、学認に参加することで複数の大学で共用でき、準備が整った大学から順次参加するといった運用にも対応できるなど、運用面での柔軟さも魅力であった。

結果

大学コンソーシアム京都では、2010 年度から e-ラーニング科目を新設し、システムの Shibboleth 対応についても代表校が率先して取り組み実装した。Shibboleth は既存システムとの融和性が高く学生や教職員に新たな負担を強いることなく導入できた。

本学での従前からの利用手順は、まずポータルサイトに誘導して ID とパスワードを入力させ、他のサービスはここからのリンクをたどって擬似的な SSO で利用していた。Shibboleth の設定を、学内サービスについてはフェデレーションと無関係に動作する設定とする(DSを表示させない)ことで、これと同じ利用感覚を実現し、既存ユーザ層の混乱を防いでいる。学外サービスを利用する場合は DS が表示されるので、その告知をするページを表示するようにしている。こうした設計が大学側で自由にできることも Shibboleth のメリットである。

また、新たなシステム構築コストも工夫しだいで低減することができ、さらに学認からの強力な支援も期待できる。

(京都産業大学 情報センター 尾崎 孝治)

